

日本中國學會報 第七十集
二〇一八年十月六日 發行 抜刷

明刊「揚州夢」版本における「維揚風月」の意義

——「楊升菴重訂」の視點から——

福永美佳

明刊「揚州夢」版本における「維揚風月」の意義

——「楊升菴重訂」の視點から——

福永美佳

一、はじめに

孫楷第によると、明代における北曲雜劇は宮廷内の鐘鼓司という役所、いわゆる内府所藏のテキスト（内府本）に依據するとされている^①。同様に、岩城秀夫によっても、『元曲選』より成立の早い明刊本は同一の系統に屬し、内府本が起源とされている^②。この見解に對して小松謙は、確かにかなりのものが内府起源であるが、内府以外からきたと思われるものもあり、これらの來源は不明だが、そのうち相當部分は宮廷にあるものの、一部宮廷とは關係をもたないテキストが存在している可能性を指摘している^③。

小松のいう宮廷外を起源とするテキストの存在に關して本稿が注目するのが、喬吉作の元雜劇「揚州夢」に關する小松の考察である。小松は、明刊の「揚州夢」テキスト群を次の三系統に分類している^④。

「楊升菴重訂」系……「揚升菴重訂」に基づくとされるもの。ここには『繼志齋元明雜劇』收載のテキスト、『雍熙樂府』收載のテキストが含まれる。

『古名家雜劇』系……『古名家雜劇』收載テキストと近い、もしくは

はこれに依據するもの。ここには『詞譜』收載のテキスト、『古名家雜劇』收載のテキストが含まれる。

折衷系……「楊升菴重訂」系と『古名家雜劇』系の雙方に依據するもの。ここには『元曲選』收載のテキスト^⑥、『古今名劇合選』收載のテキスト^⑦が含まれる。

小松の研究は、明代刊行の元雜劇をすべて同系統とする從來の説とは異なり、明刊本の起源が内府以外にも存在することを指摘した畫期的なものだが、次の三つの問題點を指摘できる。

まず「楊升菴重訂」の系統をたてる前提となる「楊升菴重訂」は、『繼志齋元明雜劇』收載のテキストの眉批で言及されているのみで、現在までその存在が確認されておらず、あくまでその存在が「推定」されるテキストに留まっているという點である。二點目は、小松の研究が發表された時點ではまだ閱覽が難しかった『改定元賢傳奇』收載のテキストが考察の對象に入っておらず、先ほどの三系列に位置づけられていないという點である。最後の點は、この小松の論考は「揚州夢」にのみ焦點をあてたものではなく、本作品を扱う部分は二頁足らずであり、諸本の異同の存在には言及しているものの、分類の根據となる

具體的な異同について詳述されていないという点である。

本稿は、『改定元賢傳奇』収録のテキスト並びに今回新たに見つかったテキストを加え、小松の研究がもつ問題点を解消し、宮廷演劇を起源としない明刊元雜劇テキストの存在を明らかにすることを目的とする。具體的には、本文批判を通じて『繼志齋元明雜劇』収録テキストの眉批で言及されている「楊升菴重訂」が楊慎（字は用修、號は升菴、一四八八〜一五五九）の妻の作として傳わる套數「維揚風月」と密接に關係することを示し、系統を分ける根拠が現存することを主張する。そして、この「維揚風月」を含む八種の明刊「揚州夢」の版本を比較し、その異同を挙げながら「揚州夢」版本の系統分析をさらに一歩進めていく。

なお本稿で使用したテキストは注に一覽にして掲載している。⁽⁸⁾

二、小松による分類と『改定元賢傳奇』

先述の小松の論考によれば、現在の諸本は「楊升菴重訂」系、『古名家雜劇』系、どちらにも依據する折衷系の三つに分類できるとされる。⁽⁹⁾

まず「楊升菴重訂」系列とされるのが『雍熙樂府』収録の「揚州夢」（以下『雍熙樂府』テキストと記す）と、『繼志齋元明雜劇』収録の「揚州夢」（以下『繼志齋本テキスト』と記す）の第一折である。但し『雍熙樂府』テキストは「揚州夢」第一折に當たる部分が収められているのみだが、『繼志齋本テキスト』は全四折を備えている。『雍熙樂府』の刊行時期は嘉靖年間（一五二二〜一五六六）以前である。一方、『繼志齋』とは金陵の書店で、その活動時期は萬曆二十六年（一五九八）〜一六一二）までとされている。⁽¹⁰⁾ 小松は『繼志齋本テキスト』第一折と『雍熙樂府』テキストが、

非常に近い本文を持つことから、この二つが依據する祖本として「楊升菴重訂」テキストを推定している。

ではこれらのテキストが基づくとされる「楊升菴重訂」とは何なのか。これは『繼志齋本テキスト』の第一折にある次の眉批に由来している。

此一折楊升菴重訂。

譯…この一折は楊升菴重訂（に基づく）。

升菴は、楊慎の號として知られているため、この眉批は、『繼志齋本テキスト』が楊慎による改訂に基づいたものであることを述べている。但し「楊升菴重訂」とされるテキストの實在は確認されていない。

以上をふまえ、小松は『雍熙樂府』テキストと『繼志齋本テキスト』が、「楊升菴重訂」を基盤として成立したと推測している。

續いて、『古名家雜劇』系統について述べる。ここには『詞譜』収録の「揚州夢」と、『古名家雜劇』収録の「揚州夢」が入る。『詞譜』は李開先（一五〇二〜一五六八）が晩年に撰じた戲曲理論書とされ、「揚州夢」第一・第二折を収める（以下『詞譜』テキストと記す）。この他に全折が揃う『古名家雜劇』収録「揚州夢」がある（以下『古名家本テキスト』と記す）。『古名家雜劇』の成立は、「女狀元」に萬曆戊子（一五八八）、「帝妃遊春」に萬曆己丑（一五八九）と記載されることに基づき、この頃だとされる。⁽¹¹⁾

ではこれらがなぜ同一の系統とされるのか。『詞譜』テキストの第一折には、本文の直前に次の文が補足されている。

已刻兗府、又刻揚州故地。

譯…すでに兗州の魯王府で出版し、また揚州の舊地で出版した。

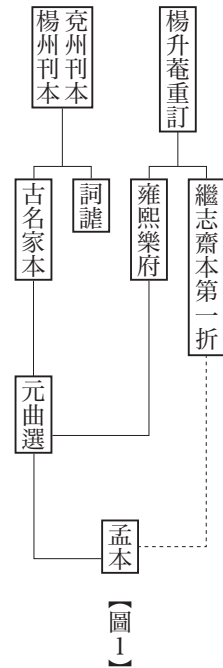
ここから、小松は「揚州夢」が嘉靖年間までに二度にわたり出版されたと指摘している。さらに、現時点では、注記に記されるテキストの

足跡を辿ることは難しいものの、『詞譜』が兗州もしくは揚州刊本に基づく可能性が高く、『詞譜』テキストと古名家本テキストがほぼ一致していることから、古名家本も兗州もしくは揚州刊本に依據している可能性が高いとも述べている。¹⁵⁾

最後に、どちらの系統にも依據するテキストとして、『元曲選』収載の「揚州夢」（以下『元曲選』テキストと記す）と、『古今名劇合選』

『元曲選』は、萬曆四十三年〜四十四年（一六一五〜一六一六）に臧懋循により編纂されたもので、編者によるテキストへの改変が多いことと知られる。小松によると、『元曲選』テキスト第一折は、『混江龍』という一曲が『雍熙樂府』のものとは一致する以外は全體的に古名家本テキストに近いとされる。一方『古今名劇合選』は、孟稱舜により崇禎六年（一六三三）に編纂され、眉批と評點が付けられている。小松によると、『古今名劇合選』は、全體としてみれば顧曲齋本と『元曲選』を主たる底本とし、『雍熙樂府』を参照し、繼志齋本を利用した可能性がある版本であり、『揚州夢』に関しては繼志齋本と一致し古名家本と異なる点をもつ、と指摘される。¹⁶⁾ この二つのテキストのみ、第一折の前に楔子がついている。

ここまでの議論から、小松は「揚州夢」について次の系統圖を想定していることみなすことができる。（以後、實線は確實在継承關係を示し、點線は継承關係の可能性を示すとする）



このほか小松が直接扱っていないテキストとして、李開先編『改定元賢傳奇』収載のテキストがある（以下改定元賢傳奇本テキストと記す）。序には、テキストに誤りがあれば訂正し、『改定元賢傳奇』と名付けたとある。¹⁷⁾ 刊行時期は早いですが、他の明刊本と同様に宮廷所蔵本に基づくと推定されており、異體字の變化からみれば、嘉靖三十七年〜萬曆十七年（一五五八〜一五八九）の間の言語状況を反映するとされている。¹⁸⁾ 『詞譜』と同じく李開先が関わるとすると、『古名家雜劇』系統テキストに近いことが豫想される。

ここまでは従来喬吉作「揚州夢」として知られる全テキストである。ところがこれと非常によく似た内容をもちながら、作者及びタイトルが異なるテキストが存在する。

三、黃娥「維揚風月」

『雍熙樂府』テキストと繼志齋本テキストの祖本と推定される「楊升菴重訂」とは、どのようなテキストだろうか。現在「楊升菴重訂」といわれる「揚州夢」の存在は確認されていない。しかし、孟本は「楊升菴重訂」の存在に關して、次の眉批において重要な示唆を與えている。

此折係楊升菴重訂。故後人混收入升菴黃夫人集內。其中間有異同、則出吳興臧晉叔本也。

譯…この折は楊升菴重訂による。ゆえに後人により『升菴黃夫人集』内にまぎれて收められた。その中の異同は、吳興の臧晉叔本に由来するものである。

この孟本の眉批には、繼志齋本テキストの眉批と同じく「楊升菴重訂」の文字がある。またここには、「楊升菴重訂」を收めるとされる『升菴黃夫人集』の存在も記されているのである。現在まで『升菴黃夫人集』の存在は確認されていないが、書名は異なるものの『升菴黃夫人集』と推定される資料が存在する。

それは楊愼の妻黃娥の著作にみえる。黃娥の著作には『楊狀元妻詩集』、『楊夫人樂府詞餘』五卷、『楊夫人曲』三卷、『黃夫人樂府』四卷、『錦字書』一卷がある²²とされている。毛先舒（一六二〇～一六八八）は『詩辯坻』巻第四で彼女を次のように評價する。

楊用修婦、亦工樂府。今刻有楊夫人詞餘五卷。一枝花天官賜福辰一套、整麗有法、韻調俱叶、大有元人風格之妙。又點絳脣嬌馬吟鞭一套、落落疏縱。錦纜龍舟一套、本元喬孟符揚州夢而略加改筆、氣頗豪宕。此三套、似非婦人所辦、恐是用修筆、誤夫人耳。

譯…楊用修（愼）の妻もまた樂府に巧みである。現在『楊夫人詞餘』五卷が存在する。【一枝花】「天宮賜福辰」一套は、きちんと整い秩序だつていながら、韻調ともに合い、元人の持つ風格のすばらしさを大いに備えている。また【點絳脣】「嬌馬吟鞭」一套は、のびやかかつおおらかである。「錦纜龍舟」一套は、元の喬孟符「揚州夢」に基づいて少し手を加え、頗る豪快である。この三套は、婦人によるものではないようだから、恐らく用修の筆で、夫人と

誤つたにすぎない。

ここにおいて毛先舒は黃娥作として傳わる三つの套數に觸れ、それぞれの特徴を談じつつ、孟本の眉批と同じく、夫の作ではないかと疑っている。さらに傍線を引いた部分では「錦纜龍舟」一套を元の喬孟符「揚州夢」の改作だとも述べているのである。この「錦纜龍舟」は「揚州夢」第一折にある【仙呂點絳脣】のメロディの冒頭の四文字に當たり、全テキストに備わっている。

現在、黃娥の著作として『楊夫人詞餘』五卷と似た名を持つ書が傳わっている。それは『楊夫人樂府』である。『楊夫人樂府』には【仙呂點絳脣】という名の套數が二曲收められるが、そのうちのひとつが「楊升菴重訂」という眉批をもつ繼志齋本テキスト、孟本テキスト及び『雍熙樂府』テキストと字句レベルで廣範な一致が認められるのである。このテキストの曲牌名の下に小さく「維揚風月」と記されていることに基づき、これ以降本テキストを「維揚風月」と呼ぶことにすると、毛先舒によつて楊愼が「揚州夢」を改訂して生み出したと疑われている「錦纜龍舟」一套というのは、まさにこの套數「維揚風月」と對應していると考えられるのである。

さらに、『楊夫人樂府』に收められる楊禹聲による引には、この書の成立に關する次のような記述がある。

今年夏過年家兄蘇門伯子、爲言夫人人情甚富、不讓易安淑眞、其詩稿逸不存、存者惟詞餘五卷。（中略）惜元無刻本僅得之手錄。藏之帳中十五年矣。（中略）萬曆戊申中秋古丹陽郡人楊禹聲題。

譯…今年の夏に同期の蘇門伯子の家に行つて、彼に言つた、夫人の才と情は大變すばらしく、李清照、朱淑眞に引けを取らないが、その詩稿は散逸し、有るのは『詞餘』五巻だけである。（中

略)惜しいことにもともと刊本がないので、手書きの抄本から寫すしかなかった。十五年の間これを所有していた。(中略)萬曆三十六年中秋古丹陽郡人楊禹聲題。

楊禹聲によると、この書は彼が手に入れ自ら寫した楊夫人による『詞餘』五卷に基づいているということになる。ただし現存するのは『楊夫人樂府』という名で三卷分である。ここでいう『詞餘』五卷と、毛先舒が『詩辯坻』で觸れる『楊夫人詞餘』五卷が同一である確證はないが、著者名、卷數が一致し、書名にも共通點がある。

では『楊夫人樂府』のものと抄本はいつ頃成立したのだろうか。引の末には「萬曆戊申」の日付がある。これを萬曆三十六年(二六〇八)とすると、もとの抄本はその十五年前、つまり一五九三年より早くに存在したことが傍線部の記述から見て取れる。

ここまでの考察は、「楊升菴重訂」といわれるテキストが、楊升庵の妻黃娥作として傳わつてゐる「維揚風月」(一五九三年以前に抄本が成立)と同じか、もしくはこれに近い可能性があることを強く示唆している。

以上の考察に基づき、從來「揚州夢」テキストに數えられず、現在まで無視されてきたテキスト、すなわち『楊夫人樂府』に收められ、黃娥作とされる「維揚風月」を「楊升菴重訂」と強いつながりを持つテキストとみなし、「揚州夢」版本のひとつとして考察する(引用する際は「維揚風月」テキストと記す)。では、從來の明刊「揚州夢」諸本のなかに、「維揚風月」テキストを加えることによって、古形のテキストとしてどのような想定が可能となるだろうか。

四、古形テキストの想定

ここでは「揚州夢」諸本間の主要な異同について論じる。異同の列挙にあたっては、從來考察の対象にならなかつたテキストを加えていることから系統ごとに分けず、テキストの先後關係を考慮し、

(雍) 嘉靖四十五年(一五六六)序を持つ『雍熙樂府』テキスト。

(改) 李開先(一五〇二〜一五六八)編纂の改定元賢傳奇本テキスト。

(詞) 李開先撰『詞諱』テキスト。

(古) 萬曆十六年(一五八八)・十七年(一五八九)刊の記載をもつ古名家本テキスト。

(維) 本研究が「楊升菴重訂」に最も近いと考えている「維揚風月」テキスト。萬曆三十六年(二六〇八)刊の引をもつ。

(繼) 萬曆二十六年〜四十年(一五九八〜一六二二)にわたつて活動したとされる繼志齋が刊行した繼志齋本テキスト。

(元) 萬曆四十三年(二六一五)・四十四年(二六一六)の序を持つ『元曲選』テキスト。

(孟) 崇禎六年(一六三三)の序をもつ孟本テキスト。

の順で記載する。原文の後の譯は成立時期が最も遅い孟本を用いる。第一折から順に検討するが、異同の少ない第二折以降はまとめて考察する。引用においては正字・俗字を區別し、可能な限りテキストとおりに記載する。

(一) 第一折

まず全テキストにある【仙呂點絳脣】を取り上げる。(例①)

(雍) 和他 春□老、瓊花瘦。

(改) 我則怕春光老、瓊花瘦。

(詞) 我只怕春光老、瓊花瘦。

(古) 我則怕春光老、瓊花瘦。

(維) 春光老、瓊花瘦。

(繼) 我則怕春光老、瓊花瘦。

(元) 我則怕春光老、瓊花瘦。

(孟) 我則怕春光老、瓊花瘦。

譯：私は、春が過ぎ、瓊花が朽ちるのを恐れる。

「我則怕」を、早口で内容を補足する襯字だとすると、歌詞は「春」以下となる。四角で圍むように「春」の後に「光」という字がない『雍熙樂府』テキスト、「維揚風月」テキスト、繼志齋本テキスト、孟本テキストと、「光」のある改定元賢傳奇本テキスト、『詞譜』テキスト、古名家本テキスト、『元曲選』テキストとに分けられる。

次に【混江龍】のなかから以下の語句を挙げたい。(例②)

(雍) 竹西歌吹古揚州。三分明月、十里紅樓。人倚雕欄品玉簫。

手捲珠簾上金鈎。

(改) 憶昔歌舞古揚州。二分明月、十里紅樓。綠水朱蘭品玉簫。

珠簾綉幕上金鈎。

(詞) 憶昔歌舞古揚州。二分明月、十里紅樓。綠水朱蘭品玉簫。

珠簾綉幕上金鈎。

(古) 憶昔歌舞古揚州。二分明月、十里紅樓。綠水朱蘭品玉簫。

珠簾綉幕上金鈎。

(維) 竹西歌吹古揚州。二分明月、十里紅樓。人倚雕欄品玉簫。

手捲珠簾上玉鈎。

(繼) 竹西歌吹古揚州。三分明月、十里紅樓。人倚雕欄品玉簫。

手捲珠簾上玉鈎。

(元) 竹西歌吹古揚州。三分明月、十里紅樓。綠水芳塘浮玉榜。

珠簾繡幕上金鈎。

(孟) 竹西歌吹古揚州。三分明月、十里紅樓。綠水芳塘浮玉榜。

珠簾繡幕上金鈎。

譯：昔の揚州では竹西の歌が笛で吹かれた。三分の明月、十里の紅樓。清らかな水邊に船を浮かべ、珠のついた簾、刺繡のあるカーテンを金鈎に掛ける。

元雜劇「揚州夢」には、晩唐期の詩人杜牧が妓女張好好との交流をよんだ「張好好詩竝序」(『全唐詩』卷五十二)や、「贈別二首」(同卷五十三)などともなったとされる詩が存在する。また、歌詞にも杜牧の詩をふまえる。

ここでは傍線で示すとおり「竹西歌吹」で始まる『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本、『元曲選』、孟本收載の各テキストと、「憶昔歌舞」で始まる改定元賢傳奇本、『詞譜』、古名家本收載の各テキストとに大別される。前者は杜牧の「題揚州禪智寺」(『全唐詩』卷五十二)の一節「誰か知る竹西の路、歌吹是れ揚州なるを」(誰知竹西路、歌吹是揚州)をふまえている。「一」と「二」という数字の違いも生じているが、これは誤寫の可能性を否定できない。後半部分は「贈別二首」其一如「春風十里揚州の路、珠簾を巻き上げるも總べて如かず」(春風十里揚州路、卷上珠簾總不如)をふまえる。

また『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本收載の各テキストに引く波線部をみると、差異は小さいものの、四角で圍んだ部分に注目すると、『雍熙樂府』テキストが「金鈎」とするのに対し、「維揚風月」テキストと繼志齋本テキストが「玉鈎」とするという違いがある。

一方、改定元賢傳奇本、『詞譜』、古名家本の各テキストには異同がない。『元曲選』テキストは、先述したとおり「竹西歌吹」という歌詞が『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本、孟本収載の各テキストと一致し、その後は『古名家雜劇』系テキストに近い。孟本テキストは『元曲選』テキストに一致している。

同じく【混江龍】から「半山堂」という句に着目したい。(例③)

- (雍) 透四萬八千門人物風流。 平山堂、竹西閣、閑花野草。
 - (改) 潤八萬四千戸人物風流。 平山堂、觀音閣、閑花野草。
 - (詞) 潤八萬四千戸人物風流。 平山堂、觀音閣、閑花野草。
 - (古) 潤八萬四千戸人物風流。 平山堂、觀音閣、閑花野草。
 - (維) 透八萬四千門人物風流。 平山堂、竹西閣、蟠花膩葉。
 - (繼) 透八萬四千門人物風流。 平山堂、竹西閣、蟠花膩葉。
 - (元) 潤八萬四千戸人物風流。 平山堂、觀音閣、閑花野草。
 - (孟) 透八萬四千門人物風流。 平山堂、竹西閣、蟠花膩葉。
- 譯：八萬四千戸の人々に風流が浸透する。平山堂、竹西閣、蟠花と膩葉。

ここは傍線部にあるように「透」という字から始まる『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本、孟本収載の各テキストと、その他に分けられる。ここでは『雍熙樂府』テキストだけ数字の並びが逆だが、意味を考れば数の多いことを表す「八萬四千」の誤りであろう。

また四角で圍んだ部分では、繼志齋本テキスト、孟本テキストを除く全てが「平山堂」とする。問題の建物が、北宋の歐陽脩により建立された「平山堂」とすれば、²⁶⁾ 晩唐を舞臺とする作品に「平山堂」が存在するのは矛盾している。この點に注意が拂われたかは定かではないが、これを繼志齋本テキスト、孟本テキストでは「平山堂」とする。

先に言及した孟本テキストの眉批にあるように、孟本は『元曲選』テキストと「楊升菴重訂」を参照したとされているが、この箇所はこの二つのテキストに加え、繼志齋本テキストも参照していることを示唆している。

次に【鵲踏枝】の一部を挙げ、歌辭の並び替えを述べたい。(例④)

- (雍) 花比他少風流。玉比他欠溫柔。端的是燕尔消魂。鶯也藏羞。
 - (改) 花比他不風流。玉比他不溫柔。端的是鶯也消魂。燕也含羞。
 - (詞) 花比他不風流。玉比他不溫柔。端的是鶯也消魂。燕也含羞。
 - (古) 花比他不風流。玉比他不溫柔。端的是鶯也消魂。燕也含羞。
 - (維) 花比他少風流。玉比他欠溫柔。端的是燕也銷魂。鶯也藏羞。
 - (繼) 花比他少風流。玉比他欠溫柔。端的是鶯也消魂。鶯也含羞。
 - (元) 花比他不風流。玉比他不溫柔。端的是鶯也消魂。燕也含羞。
 - (孟) 花比他少風流。玉比他欠溫柔。端的是燕也消魂。鶯也含羞。
- 譯：花は彼女に比べれば粹ではない。玉は彼女に比べれば温かさに缺ける。まったく燕の魂も消え入り。鶯もはにかむ。

傍線を引いた部分では、『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本、孟本収載の各テキストが「花比他少風流。玉比他欠溫柔」とし、その他のテキストとは異なる。この異同は鶯が登場する語順にも反映されている。すなわち四角で圍んだように『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本、孟本収載の各テキストでは、鶯が燕の後に登場するが、それ以外では、鶯が燕の前に登場する。ここにみられるような諸本の異同の様相は、例①、例③と同じである。

また波線部では、『雍熙樂府』テキストと「維揚風月」テキストにのみ「鶯也藏羞」とあり、これは兩者の近さを示すと思われる。以上から、改定元賢傳奇本、『詞譜』、古名家本の各テキストが近く、

多少の異同はあるものの、『元曲選』テキストもこちらに近いことを確認した。また孟本テキストが『元曲選』テキストと繼志齋本テキストに據ることも分かった。さらに『雍熙樂府』テキスト、「維揚風月」テキスト、繼志齋本テキストに近いことも明らかになった。

再び【混江龍】から引用する。(例⑤)

(雍) 淮南風月景、天下最為頭。

(改) 淮南無比景、天下最高樓。

(詞) 淮南無比景、天下最高樓。

(古) 淮南無比景、天下最高樓。

(維) 維揚風月景、天下最為頭。

(繼) 維揚風月景、天下最為頭。

(元) なし

(孟) 維揚風月景、天下最為頭。

譯：維揚の景色は天下一。

右のとおり『元曲選』テキストはこの部分を缺く。『元曲選』にはこのように『元曲選』特有と思われる歌詞が珍しくないが、これは系統の違いというより、編者による改変と考えてよいだろう。なぜなら他の部分では『古名家雜劇』系テキストに近いからである。

この意味で『元曲選』テキストの缺如を無視することは妥當であり、むしろ傍線部に注目するべきである。ここで『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本の各テキストを比べると、例②と同様に、『雍熙樂府』テキストだけが他と異なっている。

そもそも『雍熙樂府』は内府刊行で、その影響力の大きさは地名を指す「淮南」が一致するという分かりやすい形で、改定元賢傳奇本、『詞譜』、古名家本収載の各テキストにも表れている。ところが、繼志

齋本テキストは、『雍熙樂府』テキストにある「淮南」ではなく、揚州の別稱「維揚」が選擇されているのである。これは一體どういうことなのだろうか。つまり、『雍熙樂府』、「維揚風月」、繼志齋本の各テキストが基本的に字句レベルでの一致を見せつつも、繼志齋本テキストがより「維揚風月」テキストに近いことは何を意味しているのだろうか。

この状況の出現については、二つの可能性を指摘できる。²⁷⁾

ひとつは「楊升菴重訂」が、『雍熙樂府』成立以前に存在し、それに依據して『雍熙樂府』テキストが作成されたのに對し、繼志齋本テキストは「維揚風月」テキストに依據して作成されたと考える可能性である。

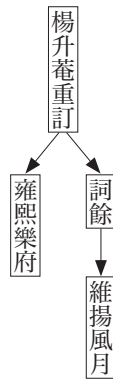
この可能性を二段階に分け説明したい。まず『雍熙樂府』テキストと「維揚風月」テキストの關係について説明する。小松が述べるように『雍熙樂府』テキストと繼志齋本テキストの本文は非常に近く、兩者をつなぐ祖本の存在が示唆される。小松は、繼志齋本テキストの眉批に記されている「楊升庵重訂」を祖本と推定しているものの、その存在については本文批判に基づく推定にとどまっていた。

とはいえ、『雍熙樂府』テキストが「楊升菴重訂」を参照することは可能だろうか。楊慎は正徳六年(一五一一)の狀元にして、宰相楊廷和の子で、嘉靖三年(一五二四)大禮の議で父が政争に敗れると、彼も嘉靖帝に逆らい雲南に流されているが、幼少より博學で知られ、多くの著述が傳わる。なかには杜牧が張好好をよんだとされる「贈別二首」に關するものもある。²⁸⁾

楊慎の活動時期は、『雍熙樂府』の編者郭助の活動時期よりも前であるため、「楊升菴重訂」が『雍熙樂府』が編集された嘉靖前期にお

いてすでに草稿の形で存在しており、かつ『雍熙樂府』の編者が廣く文獻を集めていたことからすれば、刊行はされていないものの多く出回っていたと假定できるその草稿が、『雍熙樂府』テキストの重要な典拠となつたと考えることは十分に理に適っている。この推定は『雍熙樂府』テキストと「維揚風月」テキストの本文が非常に似通っている点についても自然な説明を與える。すなわち、兩者ともに「楊升菴重訂」に依據して作成されたと考えれば、三節で述べたテキスト間の廣範な一致に對し、直接的な説明が與えられるのである。

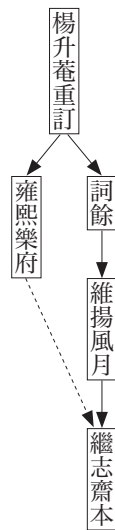
これまで述べてきた「楊升菴重訂」、「雍熙樂府」テキスト、「維揚風月」テキストの関係は、次のような系統圖で圖示できる。(但しここでは楊禹聲の引で言及されている『詞餘』を加えて系統圖を作成している)



【圖2】

續いて、繼志齋本テキストと「維揚風月」テキストの関係について考える。繼志齋本の編者は、當時最も影響力を持っていた『雍熙樂府』テキストに目を通していなかったとは考えにくい、その眉批に「楊升菴重訂に基づく」と記したこと、『雍熙樂府』ではない善本に依據したことを示そうとしていたと考えられる。この繼志齋本テキストが依據した善本が「維揚風月」であるとすれば、例②、例⑤の異同が説明できる。すなわち、繼志齋本テキストの編者は「維揚風月」を「楊升菴重訂」もしくは「楊升菴重訂」に非常に近い善本と考え、『雍熙樂府』よりも古形を残していると判断し、「維揚風月」の本文を『雍

熙樂府』よりも優先させた結果、先の例②にみられる「金鈎」と「玉鈎」、そして例⑤にみられる「淮南」と「維揚」のような異同が発生したと説明できる。この繼志齋本テキストと「維揚風月」の関係を先の圖に追加すれば次のようになる。



【圖3】

もう一つの可能性は、繼志齋本の編者が「維揚風月」テキストと、『雍熙樂府』テキストの本文が一致していることを發見し、それを「楊升菴重訂」と呼び、宣傳文句に利用したというものである。だが、この説では『雍熙樂府』テキストと「維揚風月」テキストの本文が著しく一致しているという点について何も説明できない。

以上の検討に基づき、【圖3】の繼承關係を假定することとしたい。議論を進めたい。再度【混江龍】を引く。(例⑥)

- (雍) 九曲池、小金山、白鷺沙鷗。銀行街、米市街、如龍馬驟。
- 天寧寺、雍熙寺、似蟻人稠。文章客、傲王侯、峨冠博帶。
- 豪傑士、蕩塵埃、肥馬輕裘。
- (改) 九曲池、小金山、浴鷺眠鷗。猪市街、馬市街、如龍馬聚。
- 天寧寺、咸寧寺、似蟻人稠。文章客、傲王侯、峩冠博帶。
- 豪俠士、蕩塵埃、肥馬輕裘。
- (詞) 九曲池、小金山、浴鷺眠鷗。猪市街、馬市街、如龍馬聚。
- 天寧寺、咸寧寺、似蟻人稠。文章客、傲王侯、峨冠博帶。
- 豪傑士、蕩塵埃、肥馬輕裘。

(古) 九曲池、小金山、浴鷺眠鷗。猪市街、馬市街、如龍馬聚。

〔天寧寺〕、咸寧寺、似蟻人稠。文章客、傲王侯、峩冠博帶。

豪俠士、蕩塵埃、肥馬輕裘。

(維) 九曲池、小金山、白鷺沙鷗。銀行街、米市街、如龍馬驟。

〔禪智寺〕、山光寺、似蟻人稠。

(繼) 九曲池、小金山、白鷺沙鷗。銀行街、米市街、如龍馬驟。

〔禪智寺〕、山光寺、似蟻人稠。

(元) 九曲池、小金山、浴鷺眠鷗。馬市街、米市街、如龍馬聚。

〔天寧寺〕、咸寧寺、似蟻人稠。

(孟) 九曲池、小金山、白鷺沙鷗。銀行街、米市街、如龍馬驟。

〔禪智寺〕、山光寺、似蟻人稠。

譯：九曲池、小金山では、シラサギとカモメ。銀行街、米市街で

は、龍のような馬が機敏に駆け回る。禪智寺、山光寺では、

蟻のように人々が密集している。

波線部では、『雍熙樂府』、『維揚風月』、繼志齋本、孟本收載の各テキストが「白鷺沙鷗」で一致し、他では「浴鷺眠鷗」で一致する。

だが四角で囲んだ部分を見ると、『雍熙樂府』、改定元賢傳奇本、『詞諺』、古名家本、『元曲選』收載の各テキストでは「天寧寺」とあるが、

「維揚風月」、繼志齋本、孟本收載の各テキストでは、杜牧詩「題揚州禪智寺」のタイトルにみえる「禪智寺」の名がある。ここにも、繼志齋本テキストと「維揚風月」テキストの強い結びつきが見て取れる。

また傍線部は『雍熙樂府』、改定元賢傳奇本、『詞諺』、古名家本收載の各テキストにしかない。ここから『雍熙樂府』テキストの本文が『古名家雜劇』系テキストに影響しているといえる。

一方で次のような異同もある。【後庭花】の一部を挙げる。(例⑦)

(雍) 樂陶陶醉賞瓊花雙玉甌。香馥馥斟一杯花露酒。

(改) 樂陶陶倩春風散客愁。濕浸浸錦橙漿潤紫裘。急煎煎想韋娘不自由。虛飄飄恨彩雲容易收。香馥馥斟一盃花露酒。

(詞) 樂陶陶倩春風散客愁。濕浸浸錦橙漿潤紫裘。急煎煎想韋娘不自由。虛飄飄恨彩雲容易收。香馥馥斟一盃花露酒。

(古) 樂陶陶倩春風散客愁。濕浸浸錦橙漿潤紫裘。急煎煎想韋娘不自由。虛飄飄恨彩雲容易收。香馥馥斟一盃花露酒。

(維) 樂陶陶醉賞瓊花雙玉甌。香拂拂斟一杯花露酒。

(繼) 樂陶陶倩春風散客愁。濕浸浸錦橙漿潤紫裘。急煎煎想韋娘不自由。虛飄飄恨彩雲容易收。香馥馥斟一盃花露酒。

(元) 樂陶陶倩春風散客愁。濕浸浸錦橙漿潤紫裘。急煎煎想韋娘不自由。虛飄飄恨彩雲容易收。香馥馥斟一杯花露酒。

(孟) 樂陶陶倩春風散客愁。濕浸浸錦橙漿潤紫裘。急煎煎想韋娘不自由。虛飄飄恨彩雲容易收。香馥馥斟一杯花露酒。

譯：うれしいことに春風が旅の憂いを消し去る。びつしりと橙の酒が紫色の毛皮を潤す。じりじりと韋娘のことを思えど思うにまかせず。ふわふわと彩雲がなくなることを恨む。芳し

き花露酒を注ぐ。

傍線部は『雍熙樂府』テキスト、「維揚風月」テキストにはないが、繼志齋本テキストにはある。よってこの例は、『古名家雜劇』系テキストが、繼志齋本テキストに影響を與えていることを示している。

このほか次のような例もある。【天下樂】を挙げる。(例⑧)

(雍) 飲酒呵灌得咳嗽、看花呵沁成證候、都不如勝簪花常帶酒。

(改) 看花呵致成症候、飲酒呵灌的醉休、我則待勝簪花常帶酒。

(詞) 看花呵做成症候、飲酒呵灌的醉休、我則待贍簪花常帶酒。

(古) 看花呵致成症候、飲酒呵灌の酔休、我則待勝簪花常帶酒。
 (維) 飲酒呵灌得咳嗽、看花呵沁成症候、也強似假惺惺眞出醜。
 (繼) 看花呵致成症候、飲酒呵灌の酔休、也強似假惺惺眞出醜。
 (元) 看花呵致成症候、飲酒呵灌の酔休、我則待勝簪花常帶酒。
 (孟) 看花呵致成症候、飲酒呵灌の酔休、我則待勝簪花常帶酒。
 譯：花を見るなら病になるまで、酒を飲むなら酔いつぶれるまで、
 花かんざしでめかしこみいつも酒にひたりたい。

傍線部では、『雍熙樂府』テキスト、「維揚風月」テキストの歌詞の順序が他とは逆になっている。また四角で囲んだ部分では、「維揚風月」テキストと繼志齋本テキストのみが一致する。これは繼志齋本テキストが「維揚風月」に基づいて「也強似假惺惺眞出醜」(わざとらしい醜態を晒すよりまし)という強い表現を選択していると考えられる。ところが、傍線部の順を、繼志齋本テキストが「維揚風月」から受け継いでいない。これについては、二つの可能性があり、繼志齋本の編者が「楊升菴重訂」を持つていた可能性も否定できないが、恐らくは四角で囲んだ歌辭の語氣に合わせ、直前に「酒」という言葉を導くように順番を入れ替えたのだと考えられる。

さらに、繼志齋本テキストが諸本を参照しつつ、「維揚風月」テキストを最も尊重して本文を作成したとすると、繼志齋本において本文批判が行われていたことを示している。しかもここでは内府ではなく、民間に流布するテキストに依據しているのである。これは民間に流布するテキストに正統性を認め、對照的に内府本が檢閲により都合の良いように書き換えられ古い形を失っているとみなしていたことが反映されているのではないだろうか。當時は思想的にも李卓吾の影響や「眞詩は民間にあり」という主張が展開された時代とされる。したがって、

繼志齋本テキストにおける改訂は社會のこうした動きに敏感に反應したものとみえる。

言い換えれば、ここまで議論してきた例②、例⑥にみられる杜牧詩の引用や、例⑧の直接的な言い回しへの變更はテキストを古形へ戻そうとするものとみなすことができる。繼志齋本テキストが權威のある『雍熙樂府』テキストよりも「維揚風月」テキストを尊重し、眉批のなかでわざわざ「此一折楊升菴重訂」と明記したことには、民間に流布していた「維揚風月」テキストに對する信頼とテキストを祖型に戻そうとする意志が感じられるのである。

また【青歌兒】には次のような歌詞もある。(例⑨)

(雍) 緊控着驂騶。觴賦蘭舟。潯陽江水悠悠、蘆花楓葉颼颼、紅蓼汀洲、白鷺沙鷗。

(改) 我控着驂騶。羞似有冤讎。又不是司馬江州、商婦蘭舟、烟水悠悠、楓葉颼颼、沙渚汀洲、宿鷺眠鷗。

(詞) 我控着驂騶。你爲嬌羞似有冤讎。又不是司馬江州、商婦蘭舟、烟水悠悠、楓葉颼颼、鳥浴前洲、魚躍中流。

(古) 我控着驂騶。羞似有冤讎。又不是司馬江州、商婦蘭舟、烟水悠悠、楓葉颼颼、沙渚汀洲、宿鷺眠鷗。

(維) 歷控驂騶。絲繫蘭舟。潯陽江水悠悠、蘆花楓葉颼颼、紅蓼汀洲、白芷林丘。

(繼) 我控着驂騶。你爲嬌羞似有冤讎。又不是司馬江州、商婦蘭舟、烟水悠悠、楓葉颼颼、沙渚汀洲、宿鷺眠鷗。

(元) 我控着驂騶。蘭舟、烟水悠悠、楓葉颼颼。又不是司馬江州、商婦

(孟) 我控着驂騶。你爲嬌羞暗裏凝眸。又不是司馬江州、商婦蘭舟

烟水悠悠、楓葉颼颼、沙渚汀洲、宿鷺眠鷗。

譯…私は名馬を止める。あなたはなまめかしくはにかみこつそり
凝視する。江州の司馬、蘭舟の商婦ではないが、水邊は遙か、
楓の葉はひらひらと舞う。波打ち際では、鷺が泊まり鷗が眠
る。

ここでも『雍熙樂府』テキストと「維揚風月」テキストは近い。特
に波線部は同じである。その他のテキストをみると、その違いは、四
角で囲んだ部分にある。順にみていくと、改定元賢傳奇本テキストと
古名家本テキストでは「羞似有冤讎」という部分が一致している。『元
曲選』テキストにはこの部分がない。そして『詞譜』テキストと繼志
齋本テキストは「你爲嬌羞似有冤讎」という歌詞が一致し、これに孟
本テキストが基づいているようである。

繼志齋本テキストがここでは、場景を描寫する「維揚風月」テキス
トではなく、人物の舉動を描く『古名家雜劇』系テキストに基づいて
いる。しかもほぼ同じ内容を持つ改定元賢傳奇本、『詞譜』、古名家本
収載の各テキストにおいて、『詞譜』テキストにのみみられる異同に
繼志齋本テキストが一致しているとすれば、繼志齋本テキストは『詞
譜』テキストを参照している可能性がある。

では他の折はどうであろうか。幸いにも『詞譜』には第二折が傳わ
っている。この點をもう少し検討することにした。

(二) 第二折から第四折まで

第二折は、改定元賢傳奇本、『詞譜』、古名家本、繼志齋本、『元曲選』、
孟本の各テキストが傳わる。第三・第四折は、改定元賢傳奇本、古名
家本、繼志齋本、『元曲選』、孟本の各テキストが傳わる。第一折に比

べ異同は僅かである。主なものを列擧する。

まず第二折から【小梁州】を擧げる。(例⑩)

(改) 今夜箇乘歡寵、山也有相逢。

(詞) 今夜箇乘歡寵、原來山也有相逢。

(古) 今夜箇乘歡寵、山也有相逢。

(繼) 今夜箇乘歡寵、原來山也有相逢。

(元) 今夜箇乘歡寵、山也有相逢。

(孟) 今夜箇乘歡寵、原來山也有相逢。

譯…今夜樂しむことができれば、なんと山さえも巡り合う。

四角で囲むとおり「原來」を持つのは『詞譜』テキスト、繼志齋本
テキスト、孟本テキストである。よって繼志齋本テキストが『詞譜』
テキストを参照した可能性を否定できない。

では三折以降はどのような異同が生じているだろうか。

第三折からは【探茶歌】の異同を取り上げる。(例⑪)

(改) 今日箇既得朝雲行暮雨。

(古) 今日箇既得朝雲行暮雨。

(繼) 今日箇既得朝雲行暮雨。

(元) 既然你肯把赤繩來繫足。

(孟) 今日箇若得朝雲行暮雨。

譯…いま朝の雲夕暮れの雨という關係が成就するとすれば。

『元曲選』テキストが他とは全く異なるが、改定元賢傳奇本、古名
家本、繼志齋本収載の各テキストには差がない。ここから繼志齋本テ
キストが改定元賢傳奇本テキスト、古名家本テキストのいずれか、も
しくはこれらの諸本が参照した本を参照したことが分かる。ほかに
四角で囲んだように孟本テキストの一部が異なる。

こうした孟本テキスト独自の語句は、第二折【繁尾】（『元曲選』では【黄鍾尾】）や、第四折【折桂令】にもみえる。いずれも先行テキストをふまえた部分的な書き換えである。テキストの改変や省略も辭さない『元曲選』と比べ、先行テキストを尊重し、必要に應じ手を加えるというのが孟本テキストのやり方といえよう。

第二折から第四折までの異同の考察はここまでである。第一折を除けば、テキスト間の差異を見つけることは非常に困難である。

五、おわりに

「揚州夢」テキスト相互の関係性として以下の点を指摘できる。

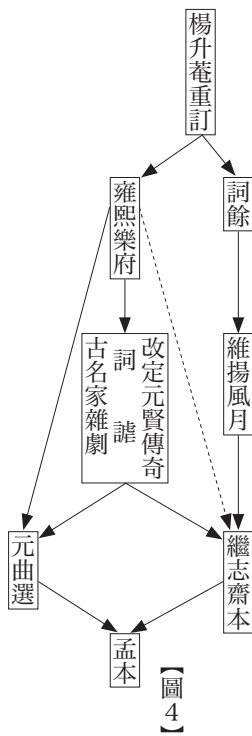
- ① 改定元賢傳奇本テキスト、古名家本テキストには、ほぼ異同がなく、『詞譜』テキストもこれに近い。
- ② 孟本テキストの本文は、繼志齋本テキストか、『元曲選』テキストと一致し、一部独自の歌詞を持つ。
- ③ 改定元賢傳奇本テキスト、古名家本テキストは、『雍熙樂府』テキストとは共通の歌詞を持つが、「維揚風月」テキストとは直接結び付かない。
- ④ 繼志齋本テキスト第一折は、「維揚風月」テキストを最も尊重して本文を作成している。また、『詞譜』テキストを参照している可能性がある。

このように「維揚風月」テキストを考察に加えることによって、本文批判の立場からも「楊升菴重訂」の存在が強く示唆されることになった。しかも「維揚風月」は、「揚州夢」テキストの善本と考えられる。但し「維揚風月」は、「楊升菴重訂」と密接な関係を持つてはいるものの、「楊升菴重訂」に基づいていると考えられる『詞餘』から作成したもの

のと明記されていることから、ある程度の改変の可能性は十分に認めべきである。したがって、『雍熙樂府』と、「維揚風月」のどちらがより善本であるかは、にわかには決定し難い。この点についてはこれ以降の研究に委ねたい。

さらに、本稿は、繼志齋本テキストの異同が紛れもなく当時の本文批判の産物であつて、かつ価値あるものは民間に存在するという當時の思想が受け容れられ、廣まっていたことを端的に示す例であること指摘している。本稿で議論した「維揚風月」の位置づけが正しいとすれば、繼志齋本の編者が民間の系列が内府本よりも正統性を持つていたと考えていたことを示唆している。これは「はじめに」で述べた小松の議論をさらに一歩進めたものと考えられる。

最後に本稿で明らかとなった「揚州夢」テキストの系統樹を作成すると、次のとおりである。



兗州刊本と揚州刊本の位置づけについても、残された課題である。

注

- (1) 孫楷第『也是園古今雜劇考』（上雜出版社、一九五三年）三「板本」七七—一五三頁。
- (2) 岩城秀夫「元刊古今雜劇三十種の流傳」『中國戲曲演劇研究』（創文社、一九七二年）五四—一五七頁。
- (3) 小松謙『中國古典演劇研究』（汲古書院、二〇〇一年）II「明代における元雜劇——讀曲用テキスト成長の過程——」参照。
- (4) 注(3) II 第六章「明刊諸本考」、二一三—二二五頁参照。小松が三系統と論じているわけではないが、繼志齋本と古名家本とを別系統と述べる。また同書では『元曲選』以前の明刊本と、『元曲選』『古今名劇合選』とを區別し、別に章を立てていることによる。
- (5) 注(3) II 第六章「明刊諸本考」、二一四頁はこれを「楊慎の改訂本」という。
- (6) 注(3) II 第五章「『元曲選』『古今名劇合選』考」、一九四頁参照。初出は『『元曲選』考』『東方學』（第百一輯、二〇〇一年一月）及び『古今名劇合選』考』『京都府立大學學術報告人文・社會』（第五二號、二〇〇〇年）。
- (7) 注(3) II 第五章「『元曲選』『古今名劇合選』考」、一九四頁参照。
- (8) 使用したテキストは次のとおり。①～⑤雜劇 ⑥～⑧散曲集
- ① 『改定元賢傳奇』李開先輯 南京圖書館藏 明嘉靖刻本影印 『續修四庫全書』一七六〇冊（上海古籍出版社、一九九五年）所收
- ② 『古名家雜劇』新安徐氏刊 北京圖書館及南京圖書館藏 明萬曆刊本影印 『古本戲曲叢刊』四集（商務印書館、一九五八年）所收
- ③ 『元明雜劇』繼志齋刊 北京圖書館及大興傅氏藏 明萬曆刊本影印 前掲『古本戲曲叢刊』四集所收
- ④ 『元曲選』臧懋循輯 浙江圖書館藏 明萬曆刻本影印 前掲『續修四庫全書』一七六一冊所收
- ⑤ 『古今名劇合選』孟稱舜編 上海圖書館藏 明崇禎刊本影印 前掲『古本戲曲叢刊』四集所收
- ⑥ 『雍熙樂府』卷四 郭勛選輯 北平圖書館藏 明嘉靖刊本影印『四部叢刊續編』（臺灣商務印書館、一九六六年）所收
- ⑦ 『詞譜』李開先撰 中國國家圖書館藏 明嘉靖刊本『中國古典戲曲論著集成』三（中國戲劇出版社、一九五九年）所收
- ⑧ 『楊夫人樂府』黃娥撰 明刻刊本影印『飲虹移所刻曲』（盧前輯、廣陵古籍刻印社、一九七九年）所收 東京大學東洋文化研究所藏
- * 『飲虹移所刻曲』所收「楊夫人樂府」の目次には「維揚風月」に「刪」の注記がある。世界書局影印本では削られているが、盧前原刻本及び廣陵古籍刻印社影印本では削られていない。
- (9) 注(3) II 第五章「『元曲選』『古今名劇合選』考」及び第六章「明刊諸本考」、一五八—一三二頁参照。
- (10) 『雍熙樂府』の成立は、少なくとも序に記す嘉靖四十五年（一五六六）より早いと考えられる。
- (11) 根ヶ山徹「陳氏繼志齋と『綴白裘合選』」（『山口大學文學會誌』第四九號、一九九九年）
- (12) 卜鍵箋校『李開先全集（修訂本）上』（上海古籍出版社、二〇一四年）「前言」一三三頁に、『詞譜』が完成していないことを残念に思う、という別れの言葉の存在が記されている。
- (13) 劉紹基主編『中國古代戲曲文學辭典』（人民文學出版社、二〇〇四年）二〇三頁。
- (14) 注(3) II 第六章「明刊諸本考」、二二三頁参照。
- (15) 注(3) II 第六章「明刊諸本考」、二二四頁参照。
- (16) 注(3) II 第六章「明刊諸本考」、二二四頁参照。

- (17) 注(3) II 第五章『元曲選』『古今名劇合選』考、一九四頁参照。
本稿では「揚州夢」テキストの存在しない息機子本、陽春奏、顧曲齋本を對象に加えない。
- (18) 注(3) II 第五章『元曲選』『古今名劇合選』考、一六八頁参照。
- (19) 注(12)「改定元賢傳奇序」、五五六頁参照。
- (20) 赤松紀彦「南京圖書館所藏『改定元賢傳奇』について附『陳搏高臥』、『青衫淚』校勘記」(『中國における通俗文學の發展及びその影響』平成十一年度科學研究費補助金研究成果報告書、二〇〇一年)
- (21) 佐藤晴彦「改定元賢傳奇」ほどの時期の言語を反映しているのか?」(『神戸外大論叢』第五七卷第一號、二〇〇六年)
- (22) 胡文楷編著、張宏生等增訂『歷代婦女著作考(增訂本)』(上海古籍出版社、二〇〇八年)一七八—一八一頁参照。
- (23) テキストとして毛先舒「詩辯砥」(郭紹虞編選、富壽蓀校點『清詩話續編』、上海古籍出版社、一九八三年)九三頁を使用した。
- (24) 『雍熙樂府』テキストの【點絳脣】と文字の配置が一致する。
- (25) 波多野太郎「十年一覺揚州夢に就いて——讀書雜記——」(『中國文學研究』第二八期、二〇〇二年)
- (26) 王學奇主編『元曲選校注』(河北教育出版社、一九九四年)第二冊下卷、二〇五四頁参照。
- (27) この二つの可能性については、査讀者より指摘を受けた。
- (28) 楊慎『升庵全集』(王雲五主編『國學基本叢書四百種』臺灣商務印書館、一九六八年)卷六十「豆蔻」、七五八頁参照。
- (29) 【圖3】には、『雍熙樂府』テキストと繼志齋本テキストの直接的影響關係を示していないが、成立年代からみて繼志齋本テキストが『雍熙樂府』テキストを参照した可能性は十分にありうる。
- (30) 注(3) II 第四章「明刊本刊行の要因」、一五六頁参照。

明刊「揚州夢」版本における「維揚風月」の意義

- (31) 「揚州夢」では、改定元賢傳奇本と古名家本の違いは使用される字體にある。例えば、改定元賢傳奇本では「兒」「從」「柳」を用いるが、古名家本では「兒」「從」「柳」を用いる。
- (32) 孟本テキストの「恐年高生計乏。(略)把今日恩情却丟下」を指す。
- (33) 孟本テキストの「薄倖微名」を指す。

本稿を執筆するにあたり、査讀者から多くの意見や指摘を賜った。ここに記して謝したい。但し本文の誤りは全て執筆者の責任である。